

# 笑ってはいけない装者 24時

あいうえおうどん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

年末の『ガキの使い 笑ってはいけないシリーズ』のシンフォギアパロディです。キャラ崩壊あります注意してください。

# 目次

第1話	『スタート』	1
第2話	『バス1』	10
第3話	『バス2』	19
第4話	『司令室1』	28
第5話	『司令室2』	37
第6話	『引き出しネタ1』	45
第7話	『引き出しネタ2』	51



## 第1話 『スタート』

笑ってはいけない装者

a m 8 : 0 0

『始まりの朝…。いつもと変わらぬ朝日が6人を優しく迎える（ナレーションの声・友里あおい）』

響「わー。なんか始まつちやいましたね」

切「アタシ、一度はこの企画に出演してみたかったんデス!! ついに夢が叶ったんデス!!」

ク「出演というかパロディだけだな」

マ「皆元気ね…」

調「どうしたの？ 元気ないけど」

マ「だってこの手の企画って絶対に私達に美味しくない展開が山盛りじゃない…」

翼「昨日からマリアはずっと愚痴愚痴と。いい加減堪忍したらどうだ？」

マ「はあ……。この剣、可愛くない……」

【いっいで待て。】

響「あ、なんか看板が！」

翼「そうだな。命令通りにここで待機した方が良さそうだな」

切「およよ！この看板も本家と同じデス！」

調「しー。本家とかそんなに言っちゃダメだよ。切ちゃん」

??「おーーーーーい」

翼「ん？何か聞こえないか？」

マ「そう？空耳じゃないかしら？」

??「おーーーーーい」

翼「ほら。聞こえた」

ク「ああ。あたしにもちやんと聞こえたぞ」

??「上ですよー」

響「うえ??」

切「な、なんデスか!？」

調「エルフナイン…!？」

装者達が空を見上げるとそこにはドローンに乗って浮遊しているエルフナインの姿が。

エ「どうですか皆さん!これは僕が開発した一人用ジェットドローン!従来のドローンに比べて燃料に水素を用いることによって…」

マ「御託はいいから。危ないから早く降りてきなさい」

エ「す、すみません……」

全員（マリアママだ……）

★ ★ ★

エ「さて、気を取り直して。皆さん。今年もやりますよ」

ク「いや、初めてだろ」

エ「えっ、いやっ！そこは毎年やってる風を装ってください！」

ク「あ、ああ。なんか悪かった」

エ「コホン。気を取り直して。今年も装者です」

響「え？どゆこと？」

切「今年も何もアタシ達はずっと装者デスよ？」

調「多分。今年も笑ってはいけない装者24時をやるってことだと思うよ」

響「なるほど！」

エ「わかりづらくてごめんなさいい……」

響「べ、別にエルフナインちゃんが悪いわけじゃないよ!!」

切「そ、そうデス!!」

エ「ありがとうございますう……。えっと、じゃあ進めさせてもらいます。皆さん！装者って言っているのになんですかその格好！すぐに着替えてもらいます！」

翼「私服でこいと言われたからそうしたのだが……」



マ「ま、まあこれも台本の上でしようし、しようがないわ」

エ「そこにお着替えボックスを用意したので自分の名前の書かれているところに入  
て着替えてください！」

『そんなわけで、SONGを前に装者生活にふさわしい格好に着替える』

エ「皆さん準備できましたか？」

全員「はい」

エ「じゃあ、響さんから出てきてもらいます」

響「はい！」

【主人公感満載イケメン装者】

エ「主人公って感じですね」

響「それほどでも」

エ「じゃあ翼さん！」

翼「はい」

【スーパーアイドル防人系装者】

エ「防人って感じですね」

翼「ああ。防人だからな」

エ「クリスさん！」

ク「あい」

【うたぎさん】

エ「わあく。クリスさん。とつてもかわいいです！」

ク「そうだろ？このフリフリはノイズに対抗するために…って何だア?!?!?なんでアタシだけこんなピンクのフリフリ衣装なんだッ!!」

翼「プツ…に、似合ってるぞ…w」

響「クリスちゃんかわいいくwwwwww」

ク「お前らアアア!!!」

エ「お、落ち着いてください！まだ全員呼び終わってません!!そういうのは終わってからやってください！」

ク「終わってからならいいのか!?!」

エ「では、調さん！」

調「はい」

【クール系ちびっこ装者】

エ「クールでかわいいですね」

調「…可愛さならクリスマスには適わない」

ク「おいッツツツ」

エ「続いては切歌さんです！」

切「デース！」

【語彙力デースデース装者】

エ「語尾がデースな人って感じですね」

切「デース！」

ク「おい、いいのか？あいつの感想どんどん適当になってんぞ…」

エ「最後にマリアさんです！」

マ「はい」

【ただのやさしい装者】

エ「やさしそう」

マ「ありがとう」

エ「それでは、ルールを説明するので全員、並んでください」

ク「お、おい。アタシはずっとこのままなのか!？」

響「いーじゃんいーじゃん！クリスマスちゃんかわいーからそのままでも！」

ク「あんにやる…！他人事だと思っつてッ…!!」

マ「まあまあ。もう着てしまったからには後戻りできないわ」

ク「クソっ……!」

エ「それではルールを説明します。一つ。これから六人には新入りとしてSONG内で24時間の装者生活を行ってもらいます。一つ。装者生活の間は絶対に笑ってはいけません。一つ。笑ってしまった場合はキツイお仕置きが待っています」

切「ついに始まるデス!!」

響「わくわく」

エ「それではSONG本部ゆきのバスがそろそろ来ますのでそれに乗っていきます  
!」

翼「SONGへ行くのにバスなのか」

マ「いつも直通のバスが出てくれれば便利なのにね」

エ「あ、来ました」

調「うわ。すごい。全体に司令の顔がラッピングされてる…」

ク「こんなんじゃ街の中走っちゃ相当なさらし者だぞ!」

エ「このバスに乗ったところから笑ってはいけないスタートです!」

『笑ってはいけない装者24時START』

『SONG本部を目指し、バスが出発。この先に待つものは一体…』

## 第2話 『バス1』

『もう笑う事は許されない。車内を包む空気は重い。しかし、笑いの刺客達は容赦なく襲いかかる』

翼「緊張するな…」

マ「ええ。つたく、誰よ。こんな企画始めたの…」

S・O・N・G「はいつからお遊びサークルになったのかしら」

翼「まあまあ。そう角を立てるな。これも戦いばかりの私達を案じての企画だろうに」

マ「だといいいけど…」

ブー

大きな停車音を立て、バスは最初の停留所に停車した。

響「お、最初の停留所！誰が来るかな！」

切「ワクワクするのデス！」

最初の笑いの刺客に一喜一憂する一同を他所に、二人の人物がバスに乗り込む。

？「ちよつと。なんでスーパーアイドルのこの私がバスなんて使わなきゃならないのよ」

？「すみません。こちらの手違いでリズムジンが間に合わなくて…」

響「!? w w w w w」

ク「お前かい w w」

調「クスッ」

翼「んっ… w w」

デブーン

『立花、雪音、月読、翼、O U T（声、エルフナイン）』

【スーパーアイドル：板場弓美】

【付き人：緒川慎次】

響 「いきなり同級生がスーパーアイドル役とか笑うよ!!…痛ッ」

調 「まさかすぎる人選…いたっ!」

ク 「オイオイ。いきなりこれとか先が思いやられるぞ…痛ッ!!」

翼 「緒川さんww…ッ!」

弓 「あー。スーパーアイドルの私がバスに乗るなんて何十年ぶりかしら。こんなに椅子って硬いのね」

緒 「すみません。次の現場までは我慢して頂くしか…」

弓 「はア?スーパーアイドルのこの私に我慢?」

緒 「すみません…」

弓 「ホントお前って使えない付き人よね」

翼 「プッ…ww」

デデーン



## 『翼、OUT』

翼 「お、緒川さんはズルい！…ッ!!」

ク 「ここが先輩の正念場だな」

響 「頑張つて！翼さん！」

弓 「はあ。もういいわ。おいお前。そこに直りなさい」

緒 「はい」

弓 「何正座してるの？私が座れないわ。四つん這いになりなさい」

緒 「…はい」

弓 「…よいしょ。ふーん。以外に悪くない座り心地ね」

緒 「…あ、ありがとうございます」

弓 「揺らすなッ（ペチン）」

緒 「は、はいッ」

翼 「wwwwww」

デブーン

『翼、OUT』

翼「あーもう！辞めて…ッ！」

切「早くも三回叩かれてるのデス…」

翼「この残酷は私にとって心地がいい…」

マ「…プツw」

デブーン

『マリア、OUT』

マ「ちよつ、もう、笑わせないでよ翼！…あ痛ツ!!」

翼「わ、笑うような事言ったか!？」

マ「ああこの剣、可愛くない…」

弓「はあ。暇ね。おいお前。何かしなさい」

緒「何かと言いますが…」

弓「何かしなさい」

緒「はいッ!!この緒川慎次、歌を歌いますッ!!」

全員「!?w w w w w w w w」

デデーン

『全員、OUT』

翼「緒川さんw w w w : ツ!」

マ「何で歌をチョイスしたのよw w よりによって貴方が : 痛ッ!」

ク「笑わざるをえないだろw w : 行ってッ!」

調「緒川さんが歌はズルい : 痛!」

響「でも見てみたいかもw : 痛ッ」

切「デスデス : デスッ!?!」

緒「それでは歌います : 『星天ギャラクシイクロス』」

翼「!?」

マ「え、デュエット曲よ!」

緒「遺伝子レベルの〜♪」

緒「インディペンデント〜（裏声）♪」

全員「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

デデーン

『全員、OUT』

翼「お腹が痛いｗｗｗｗ…ッ」

マ「急に裏声出さないでよｗｗｗｗ…あいたツ!」

ク「しかも地味にうまいのが面白すぎるだろｗｗｗｗ…ッ!」

調「まさかの裏声ｗｗ…痛!」

響「これはずつと続くの体を持たないよ!…いたッ」

切「でも面白いから楽しいのデス!!…痛ッ!」

緒 「遺伝子レベルの〜♪」

緒 「インディペンデント〜（裏声）♪」

緒 「絶望も希望も〜♪」

緒 「抱いて〜（裏声）♪」

緒 「足掻け命尽きるまで〜（裏声）♪」

弓 「ああもういいわッ!! そんな下品な声であの素晴らしい曲を聞きたくないわ。他に  
しなさい」

緒 「は、はい! それでは…、歌います!」

その他乗客 「U t a Z u k i n!」

緒 「キラキラにせかいをかえちやえッ☆」

全員 「w w w w w w w w w w」

デデーン

『全員、OUT』

翼 「こんなの無理に決まってるだろうッw w w! ツ!」

マ 「緒川さんw w w w w 貴方何でもやるのねッw w w : 痛ッ」

ク 「何でよりによつてその曲なんだッ! w w w : いてっ」

調 「お腹痛いw : ツ!」

響 「いやーもう予想のつかないことばかりでw : 痛!」

切 「先がいい意味で思いやられるデスw w w : いったッ」

弓 「あーもういいいわ。やめやめ。もうこんな所にいられないわ。ほら。降りるわよ」

緒 「は、はあ…」

二人は丁度ついた停留所にて降車していった。

翼 「はあああ。ようやく終わった…」

マ 「お疲れ様」

『開始からわずか30分。止まらないお仕置き嵐。しかしこの先には更に強力な刺客達が待ち構えている』

## 第3話 『バス2』

ブー

大きな停車音を立て、バスは停留所に停車した。

切「およよ！早速次の停留所デース！」

マ「案外ペースが早いわね」

？「代表、本日は新しい依頼が3件来ております」

？「なるほど。後で見ますねエ」

【代表：ガリイ】

【部下：フアラ】

翼「ま、まさか、オートスコアラまで出演するとは……」

切「デデデデース……」

フ「まず、最初の依頼です」

ガ「まあ待ちなさいよ。こんな公共の場で個人の依頼はできないですよ」

フ「それもそうですね」

ガ「でも仕事がなくなると移動中暇ですねエ」

フ「それなら、乗客達で実験してはいかかですか？」

ガ「なるほどオ。それは面白そうですねエ」

フ「ちよつと貴女方。このガリイ代表の実験台になつてくださる？」

マ「実験台…？」

調「まさか、思い出を…？」

ク「そんな物騒な実験台になった日にや、あたしら死ぬぞ…ッ！」

エ「どうぞ！お好きに使ってください！」

ク「おいッ！」



フ「ありがとうございます。この方、ガリイ代表は人の心の暗部を見ることができま  
す」

響「心の暗部…？」

切「デス…？」

ガ「まあ。百聞は一見に如かず。誰から調べてゆきましようかねエ。……それじゃあ  
そのハズレ装者から」

マ「ッ！折角目を逸らしてたのにッ！」

ガ「どれどれ…」

ガリイはマリアの顔全体をジロジロと見回す。

ガ「ふーん。解りました。このハズレ装者。実はオートスコアラーを一番最初に倒せ  
て、その日から鼻歌が格段に多くなり、更には裏では毎日部屋でガッツポーズをしてた

そうですねエ」

マ「えっ、ちよっ!？」

他「wwwwwwwwww」

デブーン

『立花、翼、雪音、暁、月読、OUT』

翼「マリアww…ッ！」

調「確かに。一時期すごい嬉しそうだった…痛！」

マ「ち、違うのよ!!別に毎日ガッツポーズなんかしてないわよ!!」

ガ「それともう一つ」

マ「まだあるの!？」

ガ「このハズレ装者は、調神社に行った時、大切な資料をクシャクシャに握ったまま

寝てしまい、翌日必死に折れ目を直そうと影で頑張ってたそうですね」

(※A X Z 第9話にて『資料をくしゃくしゃに握ったまま寝るマリア』が描写されています)

マ「そ、それはw」

その他「w w w w w w w」

デブーン

『全員、OUT』

翼「そんな事があったのかw w…痛ッ！」

ク「だからあの資料あんなにくしゃくしゃだったのかw…あッ！」

マ「まさか、誰にも見られてないと思っただのに…、あ痛ッ！」

ガ「まだまだありますよオ」

マ「も、もうやめッ…！」

ガ「しょうがないですねエ。実験台を変えるとしますかね。じゃあ次は…、」

ガリイは次の標的を決めるべく全員を見回す。  
そして、

ガ「次は貴女ですよオ。ハズレ装者」

マ「また私!？」

響「ぷっ…w」

切「んんっww」

デアーン

『立花、暁、OUT』

響「またマリアさんなんて笑っちゃうよww…あッ!」

切「予想してなかったデスww…痛!」

ガ「どれどれ…」

マ「もう何もないわよ…」

ガリイはマリアの顔全体をジロジロと見回す。

ガ「ふーん。解りました。このハズレ装者。控室においてあるお菓子を毎回すべて持って帰るので、だんだん置いてあるお菓子が安くなっていますねエ」

マ「え、それ本当!?!w w」

デアーン

『翼、マリア、月読、O U T』

翼「あれを毎回持って帰ってたのかw w…ツ!」

調「確かに毎回たくさん持って帰ってくるw…痛!」

切「日頃のご褒美なのデス!」

ガ「あー、そろそろ飽きましたねエ。降りるとしまししょうファラ?」

フ「わかりました。皆様。ご協力ありがとうございました」

ク「皆様ってか一人しか協力してないけどな」

マ「協力じゃないわ…。犠牲よ…」

ガ「あ、一ついい忘れてました」

全員「？」

ガ「そのこのハズレ装者。叩かれる時、『あいたツ！』なんか言っているとババア臭いですよオ？」

マ「なっ…!?!」

デデーン

『立花、翼、OUT』

ブー

大きな音を立ててバスは停留所に停車すると二人は下車していった。

マ「はああああ…。終ったわ…」

調「マリア、お疲れ様」

切「おつかれなのデス！」

マ「ありがたいとう二人共。はあ…。まだ始まったばかりでこれとか後どうなるのよ…」

『開始からわずか1時間。長かったバス移動も間もなく。しかし、これはゴールではない。更なる笑いの刺客達がS・O・N・Gで待ち受けている』

## 第4話 『司令室1』

『六人を載せたバスが、S・O・N・G・にその姿を見せた。しかし、ここはゴールではない。新たな戦場なのだ』

『笑ってはいけない舞台「S・O・N・G」……。対ノイズ機関で笑いの刺客達との戦いが始まる』

ブー

停車音とともにバスはS・O・N・G・前に停車した。

エ「着きました」

響「おー！意外に早かったね」

切「ここからが本番なのデース！」

調「気を締めていかなくちや」

マ「もう結構お尻が……」

翼「ああ。結構痛みが響く……」



ク「とうかあたしはいつまでこの格好なんだア!？」

エ「……」

ク「おい！」

エ「見てください。S・O・N・G・本部は潜水艦なんですよ」

ク「無視かよ……」

響「どんまい！クリスちゃん！」

翼「可愛いからいいではないか」

ク「こいつら……。他人事だからって……」

エ「そして見てください！この入り口にある像は初代司令の風鳴弦十郎像です」

全員「!?www」

デデーン

『全員、OUT』

そこには『xv9話の上半身が地面に埋まっている風鳴弦十郎』の像があった。

響「なにこれwww…いたッ！」

ク「どんな状況だwww…いったッ！」

翼「これはあの時のw…あッ」

マ「いやでもこれって凄いシリアスな時のよ！ネタにつk…痛いッ！ちよつと！喋ってる最中には酷いじゃない！」

調「マリア…。叩かれるときに喋ると舌噛むよ…痛！」

切「デスデス…デスッ!？」

マ「逆よ！喋ってるときに叩かれたのよ!!」

エ「まあ進みましょう」

一同はエルフナインに連れられてS・O・N・G・館内を歩く。  
そして、ある部屋の前で立ち止まった。

エ「まず、皆さんにはこの司令に挨拶してもらいます」

ク「司令って言ってもなあ…」

切「もう毎日会ってるデース…」

翼「まあ勿論叔父様では無いのだろう」

マ「誰になつてゐるのかしらね」

エ「入りますよ。…失礼します」

中は豪華な作りになつており、対面の椅子には誰かが座つてゐる。向こうを向いてゐるために誰かは解らないが。

エ「ここに、並んでください」

響「誰だろ…？」

翼「皆目検討もつかないな…」

エ「新規装者達を連れてきました」

？「ようこそ。皆さんよくいらつしやいました」

響「えっ!?! w w w w w」

切「誰デス…？」

デデーン

『立花、OUT』

【S・O・N・G・司令：先生】

響「私の学校の先生ww…痛っ!!」

マ「そんなところまで…。一般人じゃない…」

調「一般人まで起用するなんて…」

切「S・O・N・G・のこの企画に対する本気さが滲み出ているデース…」

先「皆さん。よく集まってくれました。本日からS・O・N・G・の一員として  
跋扈する特異災害に立ち向かっ…立花さんツツツツツ  
!!!!!!」

響「は、はいツツ  
!?!?」

先「今どこ向いてました?私の話がそんつつつつなにつまらないですか?」

響「い?いえ!!ちゃんと聞いてましたよ!!」

先「口答えしないっ!!」

響「は、はいッッッ!!」

先「コホン。それでは気を取り直して。…このS・O・N・Gは人類の未来を託されていても過言ではありません。故に、一人ひとりが…たあちばなさんッッッッッッ!!」

響「は、はいッ!!」

デデーン

『雪音、マリア、暁、OUT』

ク「滅茶苦茶怒られるなww…あッ!」

マ「相当目をつけられてるようねww…あいたッ!」

切「怖いデスけど笑っちゃうのデスww…デッ!」

先「先程から何か文句でも？」

響「い、いえ！そんなの微塵も思っていないですよ！！」

先「そう。それならちゃんと聞いてなさい」

響「は、はい！！」

先「すみません。何度も。コホン。：我がS・O・N：つあちいぐあぬあすあん  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

響「は、はいツツツツ!! w w w」

ゲデーン

『全員、OUT』

響「流石に三回目は笑うよw w : つ！」

翼 「これがゴリ押しと言う奴だなww…あつ！」

ク 「あのバカ、どんだけ嫌われてんだよww…ツ！」

先 「立花さんツツツツツ!!!」

響 「は、はいツツツツツ!!」

先 「 . . . 」

響 「…ふふっw」

デデーン

『立花、雪音、月読、暁、OUT』

響 「何もないのww…痛！」

ク 「ちくしょうッ！このバカに釣られたッ…痛っ！」

調 「私も響さんにつられてww…痛」

切「静寂の間はずるいデスww…デスっ！」

先「まあ。そんなわけで皆さんには新規装者として大変でしようけど今日から頑張ってもらいます」

ク「いや、どんな訳だ…」

翼「9割立花の怒鳴り漬けだったな…」

響「受ける身からしたらもう心臓に悪いよお…」

調「響さん、ご愁傷様」

切「デース…」

『司令による笑いの地獄はまだまだ続く』



## 第5話 『司令室2』

『司令による笑いの地獄はまだまだ続く』

先「暁切歌」

切「は、はいデス！」

先「暁切歌。16歳。血液型はO型。身長は155cm。合ってますか？」

切「はいデス！」

先「よろしい。では次、風鳴翼」

翼「はい」

先「風鳴翼。19歳。血液型はB型。身長は167cm。合ってますか？」

翼「はい」

先「そして、よく貧乳とネタにされますが、実は結構ある」と言われる暁切歌と1

cmしか違わない」

翼「なッ…!?なんのつもりの当てこすり…ッ！」

デアーン

『マリア、OUT』

マ「そこで翼語録は卑怯よww……っ」

先「最後に」

翼「はい」

先「…後でサイン頂戴ね」

翼「は、はい…？」

デアーン

『暁、OUT』

切「デアッ…デアッ!!」

先「次、立花響」

響「はいッ！」

先「立花響。『どんくさい』なんて名前じゃないそうですね」  
響「え？」

先「立花響。15歳。誕生日は9月の13日で血液型はO型。身長はこの間の測定では157cm。体重は：もう少し仲良くなったなら教えてあげるそうね。趣味は人助けで、好きなものはごはん&ごはん：後は、彼氏いない歴は年齢と同じ」

デデーン

『立花、雪音、OUT』

響「そ、それ私がクリスちゃんに言ったやつww：いたっ！」  
ク「あん時のかww：ッ！」

先「さて、次。月読調」

調「は、はい！」

先「月読調。15歳。A型。身長は152cm。合ってますか？」  
調「はい」

先「よろしく。次、マリア・カデンチャ、カデンツア：」

デデーン

『立花、翼、月読、OUT』

響 「先生！そこで嘸まないでよww…いたっ！」

翼 「不意打ちすぎるww…っ！」

調 「しかも何事も無かったような顔で言い直さないでww…っ！」

先 「次、マリア・カデンツァヴナ・イヴ」

マ 「はい」

先 「マリア・カデンツァヴナ・イヴ。22歳。AB型。身長は170cm」

マ 「ええ。そうよ」

先 「職業は、運転手」

マ 「違うわッ!!」

デデーン

『翼、OUT』

翼 「流石のナイスツッコミだなww…痛っ！」

先 「さて、最後ね。雪音クリス」

ク 「はい」

先「雪音クリス。18歳。A型。身長は153cm。合ってますか？」  
ク「ああ」

先「ところで、貴女はダジャレが得意なようね？」

ク「え、あ、…はあ？」

先「ちよつと、”ソング”を使ってダジャレを言ってみなさい」

ク「いや、まずダジャレが得意ってか…、それ中の人の話じゃ…」

先「やりなさい」

ク「……………S・O・N・G。だって？そんなぐらい知ってるわ！」

デブーン

『マリア、OUT』

マ「流石ねww…あいたツ！」

ク「……………言ったぞ」

先「なかなかいいセンスしてるじゃないの。ではもう一度言いなさい」

ク「は、はア!?!ただでさえシラケた奴をもう一度だと!?!」

先「やりなさい」

ク「…はあ。S. O. N. G. だって? そんなぐらい知ってるわ!」

先「もう一度、大きな声で」

ク「S. O. N. G. だって? そんなぐらい知ってるわ!!!」

先「もう一度!」

ク「S. O. N. G. だって? そんなぐらい知ってるわ!!!!」

先「アヤヒ・カデンツアヴナ・イヴで」

!!!!!!

ク「S. O. N. G. だってッ!? そんなぐらいッ知ってるわッ」

先「アヤヒナインで」

ク「S. O. N. G. でしゆかあ? そんなぐらい、しつてまふ」

先「もう一度、アヤヒ・カデンツアヴナ・イヴで」

ク「S. O. N. G. だってッ!? そんなぐらいッ知ってるわッ」

先「暫く繰り返して。そして、マリア・カデンツアヴナ・イヴ。貴女も言いなさい」

マ「え、私も!」

先「やりなさい」

マ「……S. O. N. G. だって? そんなぐらい知ってるわ!」

ク「S. O. N. G. だってッ!? そんなぐらいッ知ってるわッ」

先「繰り返しなさい」

マ「S. O. N. G. だって?そんなぐらい知ってるわ!」  
 ク「S. O. N. G. だってッ!?そんなぐらいッ知ってるわッ」  
 先「ヒカサナインとアヤヒナインでやりなさい」  
 マ「S. O. N. G. ですって〜?そんなぐらい知ってましゅ〜」  
 ク「S. O. N. G. でしゅかあ?そんなぐらい、しってまふ」  
 先「もういいわ。ありがとう」

デブーン

『全員、OUT』

響「お腹が痛いwww……痛!」

翼「まさかの中の人ネタまでwww……っ!」

ク「はあはあ……しんど……ッ!」

マ「何故私まで……っ」

切「こんなネタありデスカwww……いたっ!」

調「これは無理www……痛」

先「では。本日はよろしくお願いします」

エ「では、行きましょう」

ク「はああ…地獄だった……」

響「クリスちゃんおつかれ！」

調「お疲れ様」

切「デース」

翼「にしてもまさか中の人ネタも用いてくるとは…いいのか？」

ク「ああそうだな…。この企画のヤバさが露呈しやがったな……」

マ「ええそうね……」

『司令の笑いの猛攻により六人はすでにボロボロ。しかし、次に待ち受けるのは恐怖の引き出しネタである』



## 第6話 『引き出しネタ1』

エ「着きました。ここが皆さんのオフィスです。自分の名前の書かれているところに座ってください」

切「およー！本家と一緒に配置デース！」

調「だから本家とか言っちゃだめだよ」

マ「つてことは、引き出しネタも健在よね…」

ク「まあ。そうだろうな」

『開始から一時間三十分。怒涛の笑いの刺客たちから一時開放され、6人は羽を休める』

響「そういえば、クリスちゃんつてずっとその恰好なの？」

ク「一刻も早くこのフリフリしたヤツとはおさらばしたいが、あんにやろう…。早く着替えさせろ…！」

翼「別にいいではないか。雪音にピッタリだ。かわいいぞ」

ク「なッ!？」

響 「あくクリスちゃん、翼さんにかわいいって言われて照れてる〜!!かわいい〜!!」  
ク 「ああッ!?おいバカっ!一旦殴らせろッ!」

エ 「どうしたんですか?騒いで」

クリスが響に殴りかかろうとした時、エルフナインが部屋に入ってくる。

エ 「クリスさん!暴力はダメですよ!!」

ク 「人の尻を散々叩かせといてどの口が…」

エ 「というか、クリスさん。いつまでそんなコスプレしてるんですか!着替えてください。付いてきてください」

ク 「いやこれを着ろって言ったのはそっちだろ……」

十分後、

クリスが普通の格好に着替え直し部屋に戻ってきた。

『開始から二時間。いよいよあのネタとの長い戦いが始まる』

響「そろそろ、引き出し、やった方がいいんじゃない？」

切「遂に来たデス！引き出しネタ！」

マ「そうね。せっかく用意もしてくれてるんでしようし、やらないと可哀想ね」

響「ではでは、私が言い出しつべだからこの立花響が先陣を…」

翼「いや、待て立花。それなら私が先達を引き受けよう」

ク「それなら、あたしに行かせる。先輩」

調「クリスさん。それを言うなら」

切「アタシ達が先にやるデース！」

マ「いやいや待て待て待ちなさい。調と切歌を先にだなんてやらせられないわ。それ

なら私がやるわ」

他5人「「「「どうぞどうぞどうぞ」」」」

マ「え、……ふふっw」

デアーン

『マリア、OUT』

マ「皆、凶ったわね……っ！」

響 「いやあ。図ったというか私は、別に何も考えてなかったケド…」

翼 「ああ。私もだ」

ク 「あたしはなーんとなく読めていたがな」

調 「お笑いの基本中の基本」

切 「デスデス！」

マ 「はあ。やられたわ。…まあいいわ。どうせ全員やるんだから順番なんて関係ないッ！いくわよッ！」

【上段の引き出し：何もなし】

マ 「ふう…。中々に緊張するわね…」

【中段の引き出し：ヘッドホン(?)】

マ 「何これ？ヘッドホン？」

調 「一見普通のヘッドホンだけど…」

翼 「着けてみたらどうだ？」

マ「ええ。……………何も聞こえないわ」

切「壊れてるデス？」

マ「まさかそんな……………あ、」

翼「ん？どうした？」

マ「い、いえ。何でもないわ。最後の引き出しを開けるわ」

【下段の引き出し：ヘッドホン×2】

マ「……………ふふっw」

デブーン

『マリア、OUT』

マ「いやいや、まさか、嘘でしょww……………いたっ！」

翼「結局なんなんだ？」

マ「こ、これは……………、その……………多分、私が、いや私？私の中の人？が収録中に壊したヘッドホンね」

デデーン

『立花、雪音、翼、月読、暁、OUT』

響「いやいやそんなの笑うよwww…いたっ！」

翼「まさかのあのヘッドホンかwww…ッ！」

ク「流石、アタシ達のドンwww…いつ！」

調「もう少し壊してなかったっけ？ww…痛！」

切「でも3つでも相当デスwww…あだッ！」

マ「まさか、こんなものが入っているだなんてね……」

【このヘッドホンが後に大事件を起こすとは、この時の全員には知る由もない】

## 第7話 『引き出しネタ2』

響「ではでは、次はこの立花響が行かせていただきます！」

【上段：お茶碗、しゃもじ、箸】

響「お茶碗としゃもじと箸…？」

ク「流石の食いしん坊バカだな」

調「しかも少し汚れてるから食べた後…」

切「いつの間に食べてたデス!？」

響「た、食べてないよ！確かにごはんは好きだけど、ちゃんと時と場所は弁えているよ!!さあ、次！」

【中段：おにぎり5つ】

響「……」

ク「ほらやつぱり食いしん坊バカだな……ふふっw」

デデーン

『立花、雪音、OUT』

響「もうく!!!確かにごはんは好きだけど!!…いたっ!」

ク「ちくしょっ!この食いしん坊バカに当てられてたっ……っ!」

翼「立花。普段からこんなに隠し持つほどお腹が空いてたのだな。さぞかし辛かっただろう…。次からは遠慮なくお腹が空いたのならば言つて構わないぞ」

響「翼さんく!!!だから私は常に空腹な食いしん坊なわけじゃないですよく!!」

マ「うんうん。それもまた立花響ね」

響「マリアさんまで!!!…ああもう!じゃあ最後開けますよッ!!」

【下段：引き出しぎっしりに詰まった(飯)】

デデーン

『全員OUT』



響 「これは流石にwww……いたッ！」

翼 「立花www……ッ！」

ク 「食いしん坊バカすぎるにの程があるぞwww……つあ!!」

マ 「もう何なのこの子はwww……あいたつ！」

調 「こんなの想定外www……っ！」

切 「流石の量に閻魔様も大爆笑デスwww……いたつ！」

響 「にしてもぎっしり詰まってる……」

翼 「しかも湯気が凄い……。出来たてだな……」

調 「でもちよつと勿体無いかも……」

ク 「確かにな。折角茶碗としゃもじもあるんだし、味見したらどうだ？」

響 「え、私が!？」

ク 「他に誰がいるんだ……？」

響 「わかったよ……」

響は引き出しに詰まったごはんを茶碗によそる。

響 「では、いただきますッ！」

切 「どうデス？」

響 「…あ、普通に美味しい」

デアーン

『翼、雪音、OUT』

翼 「何かシユールだなww…痛！」

ク 「黙ってもぐもぐすんなバカww…っ!!」

響 「ごちそうさま！」

『注：残ったごはんは藤堯が美味しく戴きました』

☆ ★ ☆

翼 「さて、次は私の番だな。伊座ッ！」

【上段：何もなし】

翼 「ふう。中々に緊張するな…」

マ 「気を付けなさいよ」

翼 「ああ」

【中段：翼の尻尾（髪飾り付き）】

デブアーン

『翼、マリア、暁、OUT』

翼 「また地味なものをww…痛っ！」

マ 「まさかそれが入ってるだなんてww…あいたツ！」

切 「付け替え用デスか!?! ww…いたっ!!」

翼 「にしても凄い完成度だな…」

響 「そっくり…」

ク 「というか先輩の予備だろこれ」

翼 「この髪は本物だッ！ 紛い物ではないッ！」

マ 「ちよつと貸して」

翼 「ん？」

マリアは翼の尻尾を受け取り、そのまま翼の右頭にそれをつける。

マ 「あら、似合ってるじゃない」

響 「おー！ ツインテ翼さん！ カワイイ！」

ク 「これはこれでいいんじゃないやねえの？」

切 「調とお揃いデース!!」

調 「まさに風月ノ疾走」

翼 「ッ！ わ、私で遊ぶなッ／／／」

☆ ★ ☆

翼 「さて、気を取り直して、伊座ッ！」

【下段：ダンボール箱】

翼 「ダンボール箱？」

マ 「周りには何も書いてなさそうね。中には何が入っているのかしら」

翼 「開けるぞ……！」

【箱の中身：大量の翼の尻尾十一枚の手紙】

翼 「……………ふう」

マ 「何とか耐えられたわね」

ク 「まあこの展開はバカの時と一緒にだし薄々感づいてはいたけどな」

翼 「何か手紙に書いてあるな」

『拝啓 風鳴翼様。』

実家の庭で栽培していた翼の尻尾が立派に育ちましたので送ります。――』

デアーン

『立花、雪音、月読、暁、OUT』

響「翼さんの尻尾って栽培されてたんですか!? w w w ……いたっ!」

ク「木になるのか!? それとも地中に埋まってるのか!? w w w ……あっ!!」

調「どの季節が旬なんだろう w w ……痛!」

切「まさかの収穫物はずるいデス w w w ……デスッ!!」

『……。そのまま食べても美味しいですが、にんにくと一緒に炒めても美味しいです。』

デアーン

『翼、暁、OUT』

翼「もう駄目 w w 食べないで w w ……痛っ!」

切「そのまま食べてれるんデス!? w w w ……デスッ!」

『……。私は、一束を少し茹でてラーメンに乗せる食べ方が好きです。』

デアーン

『月読、暁、OUT』

調「翼さんの尻尾入りラーメンはご馳走間違いないww……痛っ！」  
切「298円クラスデスww……デッス!!」

『……。また収穫期を迎えたら送ります。』

トニー・グレイザーより』

デブーン

『翼、OUT』

翼「まさかのあの人wwww……ッ!!」

他（え、誰………?）

【続く】